

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

日本のなかのネパール人労働者
(変わるネパールと変わらぬネパール：
グローバル化した世界に暮らす, 第10回)

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 南, 真木人 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5108



マガール人協会が主催した文化プログラム（2001年、東京）

みなみ・まきと 1961年、札幌生まれ。筑波大学大学院修了。専門は文化人類学、南アジア研究。主要共著『エスノ・サイエンス』（京大出版会 2002年）、『文化の生産』（ドメス出版 1999年）、『アジア読本ネパール』（河出書房新社 1997年）など。



変わるネパールと変わらぬネパール

グローバル化した世界に暮らす

普通のネパール人にとって日本は入国が難しい国のひとつだ。観光ヴィザすら、日本人の身元保証人がいなければ取得できない。以前、私の職場に外来研究員としてネパールの大学教授が滞在した。彼は訪日前、同伴した奥さんの「日本のヴィザが押されたパスポート」を売らないかと、何人かに持ちかけられたという。他人のパスポートが使えること自体不思議だが、闇で流通する日本のヴィザの売り値相場は、百五十〜二百万円に高騰しているそうだ。

そうまでして日本に來たい理由は、高給と安全、そして同じアジアの国だという親しみである。ネパールの年間所得にあたる金が、一か月で稼げる国なのだから、無理からぬことだろう。かくして日本には、二〇〇〇年現在、いわゆる「超過滞在」し、資格外で就労するネパール人が約四千人暮らす。これには技能や留学など留資格をもって住む、約二千人のネパール人は含まない。

ネパール人労働者の就労先は、日本人が忌避する「3K職」（きつい、きたない、危険）の屋内工業がほとんどだ。知り合いのなかで滞日が最長の人は十六年に達し、奥さん呼び寄せ共働きしている。そんな彼

日本のなかのネパール人労働者

（女）らの望みは、送金でネパールの首都に大きな家を建て、子供に良い教育を受けさせることだ。帰国後、事業を始める夢もあるが、こちらは成功していない人が多い。

もとよりネパール人労働者は、入国管理局に捕まれば退去強制させられる弱い立場にある。また、それゆえ雇用者に足もとを見られやすい。不利な立場を自助するため、人びとは民族単位の互助組織を作り、日本の労働組合やNGOの支援を得ながら、事故や病気、収容などの問題に対処する。マガール人の場合、関東と東海地方に協会があり、互助以外にスポーツ大会やコンサート、講演会などを開いて親睦を深め、情報を交換している。本国の民族協会本部への寄付と連携も重要である。民主化後のネパールの民族運動は、海外の同胞支部により支援され、活性化している面が少なくないのだ。

そんな紐帯の一例として、第七回の香港の話で紹介した本国の人気歌手シラさんが、八月、タム人協会の招きで来日する。残念ながら私は海外出張で、彼女に再会できない。さもなくば大阪でも公演を企画し、ネパールのポピュラー音楽を皆さんに堪能してもらえたのだが……。

第10回

国立民族学博物館助教授
写真文 南真木人